写真でふりかえる 飛行場と立川の100年

1922年（大正11）に農村地帯だった立川に飛行場が開設されてから、100年の時が流れました。この間に立川市は、多摩地域の中核をなす都市へと飛躍的に発展しました。今回の特集では次の100年に向けて、現在までの飛行場と立川市のあゆみを、市史編さん室がこれまで調査・収集した写真資料から振り返ります。

1 立川飛行場の建設

1921年、陸軍の航空第五大隊（のち、飛行第五大隊→同第五聯隊→同第五戦隊に改編）の敷地として立川のほかに川越（現埼玉県川越市）・小川（現小平市）・上溝（現神奈川県相模原市）が候補地となりました。その中で立川が選定され、翌1922年に立川飛行場が建設されました。工事には当時では珍しいトラクターも使われ、山林原野や桑畑は飛行場へと変貌しました。

※『たちかわ物語 vol.14』P. 2「立川おっこぼれ話」を参照

整地作業中の立川飛行場（1922年）▶

2 飛行第五大隊の移駐

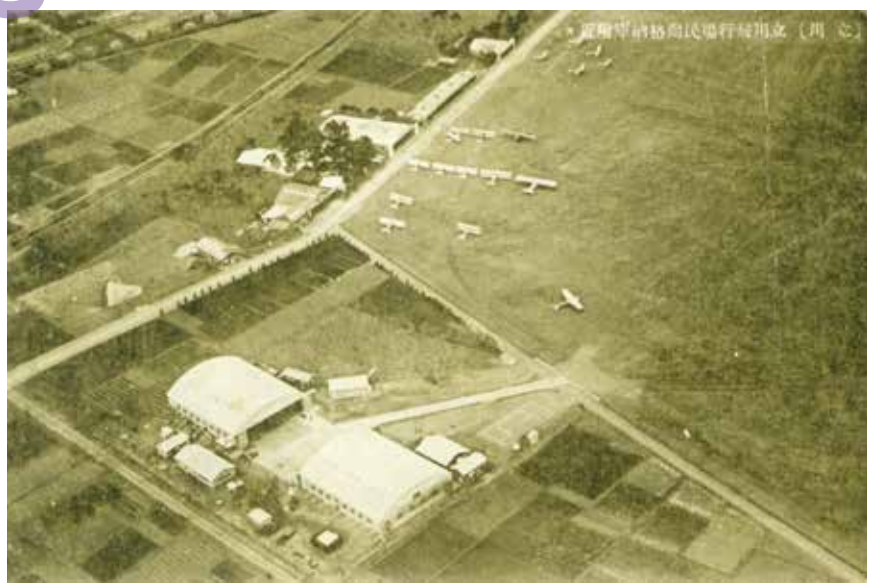
◀飛行第五大隊を出迎える立川村民〔絵葉書〕（1922年）

飛行場正門は立川駅から北へおよそ300メートル離れた場所にありました。当時は砂川・所沢へ向かう街道があるほかはほとんどが原野・畑で、夜はとても暗く、地元の人でも近づくのに勇気がいる場所だったといいます。

▲建設中の格納庫（1922年）

1922年11月10日、飛行第五大隊は立川に移駐し、立川駅で村長や青年団のほか、多くの人々の出迎えを受けました。立川飛行場と関連施設の開設は人口増加をもたらし、1923年12月に立川村は立川町になりました。

3 「空都」たちかわの隆盛



◀民間航空が集中した飛行場西地区〔絵葉書〕（1931年）

1923年に日本飛行学校が立川飛行場に練習所を開設しました。また、関東大震災の影響で、朝日新聞社航空部などが洲崎（現江東区）から立川飛行場に移転し、民間の利用も活発になりました。国際飛行場としても利用され、立川は「空都」として世界的に知られるようになりました。1930年には飛行場でにぎわう立川の繁栄を祝う「立川小唄」が発表されました。

1931年に羽田飛行場が完成して民間航空が移転すると、立川飛行場は軍の専用になりました。

4 飛行場周辺と立川排水路

終戦直後における立川飛行場
（1945年 航空写真に加筆）

立川飛行場の開設は、人口の増加や雇用の創出など、立川に大きな繁栄をもたらしました。ところが、陸軍と飛行場に主導された急速な発展に対しインフラの整備は追いつかず、さまざまな都市問題を抱えることにもなりました。その一つが排水問題です。大雨や長雨により、飛行場や周辺の敷地からあふれた雨水は東南の立川駅方面へ流れ下り、立川駅一帯はしばしば大きな浸水・冠水に見舞われました。

立川駅北口の冠水（1935年 立川市蔵）

この水害の解決のため、飛行場の東南部から多摩川までの全長約４kmの排水路が開削されることになりました。第二次世界大戦中の1943年11月に測量が行われて翌年４月から工事が始まりました。写真の青色で示した箇所が排水路です。この立川排水路は終戦後の1947年４月に通水し、1949年８月に「緑川」と命名されました。その後、市民の要望もあって1960年から覆蓋（暗渠化）工事が行われ、現在は駐車場や駐輪場、公園、道路など様々に活用されています。

※立川飛行場周辺の軍事施設・軍需工場については『たちかわ物語 vol. 8』P.10「立川おっこぼれ話」を参照

立川飛行場関連年表（1921～1945） 太字は飛行場の画期となった出来事

1921（大正10）	陸軍省が立川飛行場の開設を決定
1922	**立川飛行場開設、飛行第五大隊移駐**
1923	日本飛行学校が立川飛行場に練習所を開設 関東大震災がおこる 朝日新聞東西定期航空会が洲崎から立川へ移転 立川村、町制施行により立川町となる
1929（昭和4）	逓信省が立川を国際飛行場と定める 日本航空輸送が立川－大阪間の飛行を開始
1930	石川島飛行機製作所が立川に本拠地を移転
1931	日本航空輸送が立川から羽田飛行場へ移転 満洲事変勃発
1932	**立川飛行場が陸軍の専用飛行場となる**
1933	民間航空事業者が立川飛行場を立ち退く
1934	陸軍航空補給部支部が所沢から立川へ移転
1935	立川陸軍航空支廠設立
1936	石川島飛行機製作所が立川飛行機株式会社へ改称
1937	神風号が立川－ロンドン間を飛行 ＊都市間連絡飛行の世界最速記録を樹立 盧溝橋事件発生、日中戦争に発展
1939	陸軍航空技術学校が所沢から立川へ移転 飛行第五戦隊が立川から柏へ移転
1940	陸軍航空工廠が名古屋から立川へ移転 立川町、市制施行により立川市となる
1941	太平洋戦争開戦
1943	砂川村に高射砲部隊開設
1944	立川駅北口一帯の建物疎開開始 立川飛行場からの排水路開削工事開始
1945	米軍機により立川市・砂川村が空襲をうける 第二次世界大戦終戦

戦後の飛行場

当初、東京の「空の玄関口」として民間にも利用された飛行場は、戦後に進駐した米軍によって、周辺の多くの軍需工場とともに接収され、立川基地として整備されました。

5 陸軍飛行場から米軍基地へ

立川駅のクリスマス装飾（1950年）

立川基地に米軍が進駐したことで、米軍機が盛んに行きかうようになった一方、周辺は米国文化の最前線にもなりました。駅を飾るサンタクロースと輸送機はそれを象徴しています。

諏訪通りの仮装行列（1955年）

立川基地メインゲート北側（1960年代 米空軍第374空輸航空団広報部提供）

6 外国人向けの店

Souvenir Store＝土産物店

基地に駐留する米軍将兵は、購買力の新たな担い手にもなりました。現在の西地下道南側出口付近から立川駅方向を写した上の写真では、右側に外国人向けの土産物店が写っています。こうした店舗が、立川駅の北口だけでなく、線路をまたいだ南口にも広がっていました。

7 基地を眼前に栄えるまち

写真は現在の曙町二丁目交差点にあたる地点から北西方向を写したものです。写真中央から左下に向かう並木が基地と市街地の境界線です。周辺には、当時の人気製品から、米兵向けと思われる英字のものまで、様々な看板が並んでいます。

立川飛行場関連年表（1945～2022）

（昭和20）1945	**米軍が進駐し立川飛行場及び関連施設を接収**
1947	立川排水路が完成、49年「緑川」と命名
1950	朝鮮戦争開戦（～53年休戦）
1954	砂川村、町制施行により砂川町となる
1955	砂川で基地拡張反対運動（砂川闘争）おこる 立川基地を含む五米軍基地の拡張計画公表
1956	国が立川基地拡張予定地測量の中止を発表
1960	緑川の覆蓋（暗渠化）工事が始まる
1961	米軍のベトナム戦争介入が本格化（～73年）
1963	立川市と砂川町が合併
1968	米軍が立川基地拡張計画の中止を決定
1969	米軍が立川基地での飛行業務を停止
1972	自衛隊が立川基地へ移駐 立川基地の一部敷地が返還される
1977	**立川基地全面返還**
1979	国が立川基地跡地利用計画大綱を決定
1983	基地跡地に国営昭和記念公園が一部開園 基地跡地に陸上自衛隊立川駐屯地が完成
（平成元）1989	立川駅北口周辺の都市計画事業が決定
1990	基地メインゲート跡に「憩いの場」が完成
1994	基地跡地に「ファーレ立川」がまちびらき
1995	広域防災基地の全施設が基地跡地に完成
1998	多摩モノレール部分開業（00年現区間開業）
2003	国の基地跡地の処理方針が「原則活用」に
2005	国営昭和記念公園「みどりの文化ゾーン」開園
2010	立川市役所が基地跡地へ移転
（令和4）2022	基地跡地で「たちむにぃ」が試験操業開始

8 鉄道から緑道へ

現在の栄緑地は、1972年の基地一部返還に伴って廃止された引き込み線の跡地です。鉄道を利用して物資を運ぶために中央線から飛行場東側まで敷かれ、戦前は飛行機工場に、戦後は米軍に使用されました。

廃止された引き込み線（1976年）

返還後の基地内（1980年頃）

9 役目を終えた基地施設

写真は日本側へ返還された後の基地内の様子です。給水塔は７の写真中央にあるのと同じものです。立川基地の施設は、民間へ返還された敷地の一部施設を除き、ほとんどが跡地開発の中で解体されました。

サンサンロードを走る多摩モノレール（2023年 立川市蔵）

10 基地のゲートが市街地のゲートに

旧立川飛行場正門・立川基地メインゲートだった区画には、市制50周年事業の一環で広場「憩いの場」が整備され、アートと一体となった業務地区「ファーレ立川」の玄関口のようになっています。

完成した広場「憩いの場」（1990年）

現在の憩いの場
曙町二丁目交差点北東側から
（2023年 立川市蔵）

ファーレ立川に配置された
アート（2023年 立川市蔵）

11 基地跡地とまちづくり

基地の返還後は、その跡地開発を中心にしたまちづくりが進められました。東側地区では、新たな交通の軸となる多摩モノレールの軌道や車両基地の建設に基地跡地が活用され、その周囲に公共機関や商業施設などの新たな街区が造られました。西側地区でも「クリーンセンターたちむにぃ」などが整備されています。

基地跡地にある公共機関の例
- 立川市役所
- 国営昭和記念公園
- 広域防災基地
- 自治大学校
- 国立国語研究所
- 国文学研究資料館
- 統計数理研究所
- 国立極地研究所
- 東京地裁支部

立川市役所（2010年 立川市蔵）

空から見た立川駅北口方面（2015年 立川市蔵）

むすびにかえて

今回は飛行場とそれを取り巻く街並みが移り変わってきたそのときどきのすがたを、写真で振り返りました。これからの立川市は、どのような街になっていくのでしょうか。その行く末を探る一助となるべく、引き続き、市史の編さんを進めていきます。

［注］本特集に使用した写真は、特に記したものを除き立川市歴史民俗資料館蔵。